

之
南
島
島

REEL No. A-0449

0552

アジア歴史資料センター

「カーク」島海入
南洋群島嶼領事信新件

(昭和七年七月廿日調)

南洋群島
嶼領事

南洋群島
嶼領事

1. 4. 1.

南洋群島

分 類 A 4. 1. 0. 3)

南島島々東洋府管内編入件

南島島(元和「マール」島)小笠原母島々南東嶼南六六〇海

里ノ地帯ニ存一八六四年米日航ニ依テ發見ニシテ南島島々ノ海

國ニ記載セラルルニ依テ南洋群島ニ居ルリシニ未邦人ノ以治十二

年(一八七九年)以來屢々南島島々ノ島々無人島々ノ破メ居ルカ

以治北九年(一八九六年)水谷某上陸シ同年十二月廿八日カサ島

母島々ノ島々(無人島々)二十三島ヲ拘捕セラルルニ依テ今島借

外務省

ニ由リ以治北一年(一八九八年)七月廿四日以テ東洋府南洋
南洋群島司ノ沙友トシ同年十月十九日十年ノ期限ノ以テ水谷
ニ之ヲ借ラナリ

是ノ島々米人「キヤパレン」ロース、ヒルノ以治北二年(一八八九年)

同島々米々世人島々ノ海々米口ノ旗ヲ拂子樹ニ結ビテ去リ

南洋群島々々米々島々編入セト存去ニテカ漸ク以治北五年

(一九〇二年)同島々米々捕島々ニ從テ南洋群島々々々々々々々々々々

外務省

以テ物ヲ存者古平公使ヲシテ同島カ風ニ乗舟付下ニ
 編入之理ニ本邦人ノ粉化シ居ル迄方テ送付セムト共ニ、彼
 島人同テ舟ヲ見テ「トリス」ニテ「右」ヲ呼ブ送付ニ由
 然西島カ「船」ヲ起スルヲ阻ケルガ為軍艦空遣ニ
 石井書記長ヲ塔乗ル令島同向ニシタリ。石井書記長ニ
 在知知未至公使「トリス」此件交付ニ然物政所官ニ於テ
 為ル「トリス」令島居住ル人トノ御交ヲ阻メテヤ趣石
 井書記長ヲ揚州ニシテ

外務省

「トリス」他ヲ布告スル物信「トリス」南島島ニ本邦人
 居住ルニ「トリス」ニ送付テ命セテ「トリス」中入ルニ「トリス」
 之ヲ拒絶ニシテ、
 西島島ニ「トリス」投錨ノ遣テ、入塔ニ由テ港内ニ
 ナカリシ為附近ノ漂流ニシテ石井書記長ニ「トリス」向來
 秋ニ甲附以下「トリス」ノ石井書記長「トリス」
 本件ノ送付先書狀及「トリス」未公使未東ヲ托シテ七月廿九日
 内各ノ途ニ「トリス」送付ル「トリス」一行未着、秋ニ甲附ニ

外務省

(分 類 A 4.10.3)

南鳥島ヲ東京府管下ニ編入ノ件

(昭和七年五月三十一日)

南鳥島(元名「マールカス」島)ハ小笠原母島ヲ去ル東微南六六〇海里ノ地點ニ存シ一八六四年米國船ニ依テ發見セラレ爾來各國ノ海圖ニ記載セラレタルモ其ノ所屬確定シ居ラザリシ處本邦人ハ明治十二年(一八七九年)以來屢々同島ヲ認メ無人島ナルヲ確メ居タルカ明治二十九年(一八九六年)水谷某上陸シ同年十二月二十八日小笠原母島ヨリ労働者(婦人小兒共)二十三名ヲ移住セシムルト共ニ同島借下方願出タルヲ以テ右許可ニ先立チ同島ノ所屬ヲ決スルノ要ニ迫ラレ明治三十一年(一八九八年)七月二十四日ヲ以テ東京府所屬小笠原島司ノ所管トシ同八月十九日十年ノ期限ヲ以テ水谷ニ之ヲ貸下タリ

外務省

5.8

(録 抄 誌)

是ヨリ變米人「キャブテン、ロース、ヒル」ハ明治二十二年(一八八九年)同島ニ來リ無人島ナルヲ認メ米國國旗ヲ椰子樹ニ結ヒテ去リ爾來同島ヲ米國領ニ編入セント奔走シタルカ漸ク明治三十五年(一九〇二年)同島ニ於テ捕鳥ニ從事シ併セテ地質研究等ヲ爲スニ付米國政府ノ認許ヲ得タル趣ヲ以テ同島ニ赴クコトトナリタルヲ以テ我方ハ在米高平公使ヲシテ同島カ夙ニ東京府管下ニ編入セラレ現ニ本邦人ノ移住シ居ル次第ヲ説明セシムルト共ニ、既ニ同島へ向ケ出發セル「ロース、ヒル」ニ對シ右事情ヲ説明シ且彼我兩者間ニ紛争惹起スルヲ避ケンカ爲軍艦笠置ニ石井書記官ヲ搭乘セシメ七月二十三日同島ニ向ハシメタリ、石井書記官ハ在本邦米國公使ヨリ「ヒル」宛本件交渉ハ彼我政府間ニ於テ爲サルヘキモノニシテ、同島居

外務省

5.8

住日本人トノ衝突ヲ避クヘキ趣旨ノ書翰ヲ携行セリ
他方「ロース、ヒル」ハ布哇ニ至リ我領事ニ對シ、南鳥島ニ本邦人
居住スルニ於テハ之ニ退去ヲ命セラレタキ旨申入レタルモ領事ハ之
ヲ拒絶シタリ
笠置ハ南鳥島ニ於テ海水深ク投錨ノ道ナク入港シ得ヘキ港灣モナカ
リシ爲附近ヲ漂流シタルカ石炭缺乏ノ爲秋元中尉以下十七名ヲ殘シ
之ニ石井書記官ヨリ「ヒル」宛本件ヲ説明セル書狀及「ヒ」宛米公
使書狀ヲ托シテ七月二十九日歸國ノ途ニ就キタル處翌三十日「ヒル」
一行來着、秋元中尉ハ訓令ニ依リ前記書狀ヲ交付スルト共ニ一行ノ
五名ニ責任者一名ノ上陸ヲ許シ一行中農務省及博物館ノ二博士ニハ
特ニ一々住宅ヲ供シソノ動植物研究ノ便ヲ計リタルカ、滯島許可ハ

(添付書ト)

外務省

5.8

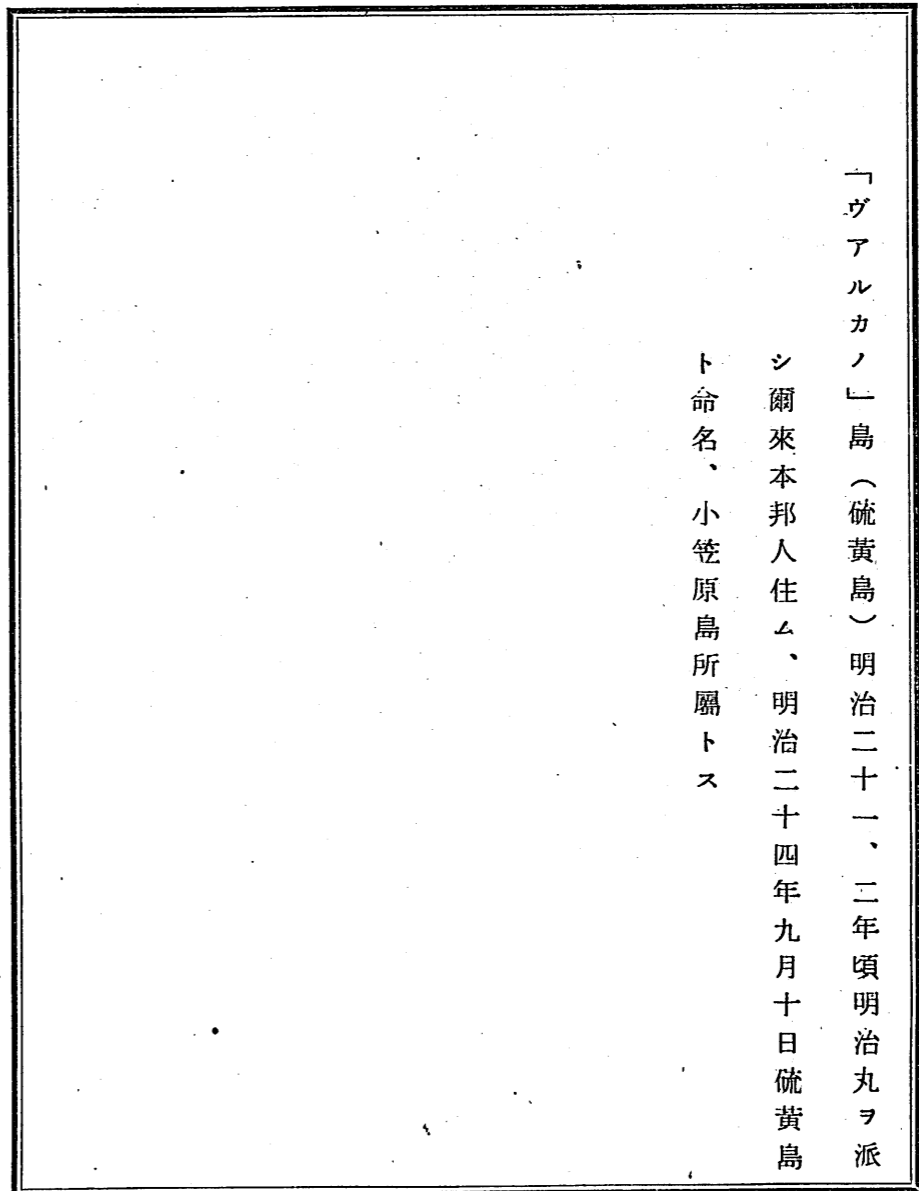
一週間ニ限リタル爲一行ハ七日朝退去シタリ
ソノ後八月中軍艦高千穂ヲ同島ニ差向ケ駐留員ヲ引揚ケタリ
「ロース、ヒル」ハ捕鳥ノ計畫失敗ニ歸シ損害ヲ蒙リタルハ日本政
府ノ責ナリトテ米國政府ヲ通シ損害賠償ノ訴ヲ起スヘシト傳ヘラレ
タルモ其後ノ顛末記録ナシ。

(添付書ト)

附、中鳥島、南鳥島ノ北方洋上ニアリ英米水路部ノ書類中ニハ「
ガンヂス」島ト記載セラレアリタルモノ存否不確
實トセラレタリ明治四十年八月山田某發見届出アリ
タルヲ以テ中ノ鳥島ト命名、小笠原島所屬ニ加ヘン
トシタルモノノ如キモノノ決定等不詳本邦人ノ住否
不詳

外務省

5.8

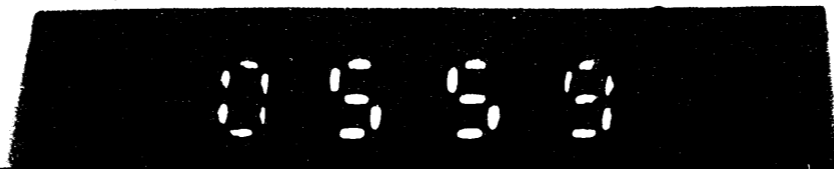


「ヴァルカノ」島（硫黄島）明治二十一、二年頃明治丸ヲ派
 シ爾來本邦人住ム、明治二十四年九月十日硫黄島
 ト命名、小笠原島所屬トス

（赤作誌）

外務省

5.8



謹呈

南鳥島ニ就イテ
「隠レタル帝國外交史」一頁

昭和十七年三月 外務省南洋局 石井 建次

岸文書課長殿

去ル三月四日敵機ノ來襲ヲ受ケタ南鳥島ニ就イテハ、一般ノ人達
ハ恐ラク之レ迄殆ドソノ存在ニサヘ氣ガ附カナカッタコトト思フ。
空襲ノ翌日即チ五日ノ各新聞ハ、トツプ。ニユースニ大活字デ此ノ
島ノ名ヲ掲ゲテ大本營ノ發表ヲ掲載シタ上、概ネ次ノ様ナ註釋ヲ附
シテキル。南鳥島ハ本州ヨリ東南約二千キロ小笠原眞東約千キロ
ノ太平洋上北緯二十四度十四分東經百五十四度ニアリ、モトマ
ス島ト呼バレル無人ノ一孤島デアツタガ、明治二十九年邦人水谷新
六ガ最初ニ足跡ヲ印シテ以來三十一年日本領トシテ公布、同時ニ小
笠原支廳所管ニ編入サレタ。島ノ周圍ハ十三キロ高サ五メートル以
下ノ珊瑚島デ、特産物トシテハ燐礦、椰子、鳥毛、繸ナドヲ産スル。
南岸ニ發見者ノ名ニ「水谷」水谷、聚落ガアル。昭和十年ノ人口調査
デハ僅カ五人デアツタ。コレデ大體南鳥島ノ輪廓ガ判ツタワケデ
アルガ、此ノ島ニ就イテハ未ダ一般ニ知ラレテキナイ興味深一挿
話ガアル。

2
話ハ四十年前ノ昔ニ遡ル。即チ、明治三十五年七月月中旬ウシント
ン駐劄高平公使カラ突然、マールカス島ニ關シテ外務本省ニ互ノ趣旨
ノ來電カアツタ。キヤブテン。ロースビルナル者ハ今般合衆國政府
ヨリマールカス島ニ對スル權利ヲ允許サレタノデ、何島占領ノ爲ニ一
隊ヲ率ヒテ七月十一日布匠ボノル港出發ノ筈ナリト云フ。若シ帝
國政府ニシテ該島ノ所有權ヲ主張セントセバ本使ハ其意ヲ合衆國政
府ニ通告スベキモ、則チキヤブテンニ面會シ詳細ノ説明ヲ爲スガタ
メニ直チニ單艦一隻ヲ該島ニ派遣セラレ度シ、トイフノデアアル。ソ
ノホカ高平公使ノ來電ハ、マールカス島ハマールカス島發見ニ歸スル地
實ヲ千八百八十九年（明治二十二年）中ニ合衆國政府ニ委出シタ趣
デアリ、又向キキヤブテンカ前向（明治三十二年）俄俄整備ノ爲メ同
島ニ立寄ツタ際島ニハ日本政府ヨリ附與セラレタル公文並ニ書ヲ所付
セル日本人二十名許カ在留シテ居テ米國船長ニ銃器ヲ垂向クタ由テ
アルト報ジテキル。

3
ソコデ、コノ突發事件ガ如何ニ發展シ如何様ニ終結シタカラ語ル
前ニ、更ニ遡ツテマールカス島ハ問題ノ明治三十五年ニ至ル迄帝國及
ビ米國ト如何ナル關係ニアツタカラ調べテ見ヨウ。同島ハ素ト一個
ノ無人島デアツテ海圖ニハマールカス島又ハウヰークス島ノ名ヲ以テ
記載サレテキタガ、ソノ所屬ハ明デナカツタ。トコロガ明治十二年、
静岡縣人齋藤清左衛門外二名ノ者ハ帆船前船ヲ南洋巡航中小笠原島ヲ
經テ該島附近ニ至リ、其後殆ト毎年同所ニ航行シタガ、天候等ノ都
合デ每航上陸ノ目的ヲ達シナカツタ。トコロ、明治二十六年五月巡航
ノ際初メテ上陸ヲ遂ゲ島ノ實況ヲ探査シタコトガアル。次デ明治二
十九年十二月ニ至リ、豫テ探險ノ爲メ此ノ方面ニ巡航中デアツタ帆
前船天祐丸ノ船長水谷新六ハ、初メテ此ノ島ヲ占領シ、直チニ勞働
者二十名ヲ小笠原島カラ移シテ屋舎物置等ヲ建テ且ツ捕鳥ト漁業ヲ
創メ、翌三十年四月一旦歸京シテ其ノ旨東京府ニ届出デ島ノ貸下ヲ
願出デタ。

仍テ我が政府ハ南鳥島（舊名マカス島）ヲ東京府所屬トシテ小笠原島廳ノ管轄ノ下ニ置クコトニ決定シ、明治三十一年七月二十四日附東京府公文ヲ以テ水谷新六ニ貸下ゲタノデアル。爾來同人ノ經營ハ年々ソノ歩ヲ進メテ明治三十四五年頃ニハ年産高一萬四千圓以上ニ上リ、又移住民モ三十四年七月頃ニハ男女合セテ六七十名アツタトノコトデアル。

一方米合衆國トマカス島トノ關係ハドウデアツタカトイフニ、問題ノ男ヨシズルハ千八百八十九年風帆船デ南洋巡航中此ノ島ニ至リソノ無人島ナルヲ見テ之ガ領有ヲ企テ、一椰樹ニ合衆國々旗ヲ掲ゲテ占領ノ證トシタ。ソシテ直ニ米國ノ廻航シ同地駐在ノ米國公使ヲ經テ國務省ニ對シマカス島發見ノ告知ヲ提出シテ鳥糞採獲ノ權利ヲ要請シタノデアル。

之ニ對シ國務省ハ千八百五十六年八月十八日附ノ「米國人鳥糞採獲ニ關スル法律」ニ基キ右申請理由ノ當否ヲ審定スルコトナク、單

ニ之ヲ記録ニ留メ置イタ。然ルニ前記法律中ニハ申請者ガ鳥糞採獲ニ着手スルニハ誓約ヲ要スル旨ノ規定ガアル處、ヨシズルハ千九百二年（明治三十五年）ニ至リ初メテ右誓約ヲ提出シ、茲ニ國務省ヨリマカス島ノ鳥糞採獲權ヲ允許セラレタノデ、捕鳥、鳥糞採掘ノ爲メ一ノ會社マデ創設シタ上一隻ノ風帆船ヲ買入レテ、同年七月十一日赤ノ島ル港ヲ出帆シ勇ンデマカス島ヘ赴イタ次第デアル。但シ前記法律中ニハ採獲權允許ノ都度各國ニ對シ布告スベシトノ規定ガアルガ、本件ノ場合ニハ何等布告スルトコロガナカツタ。

6
備、高平公使カラノ電報ニ接シテ、帝國政府ハ因ニズルノ南島
島嶼有ノ企ニ對シドノ様ナ措置ヲ採ツタカ。我カ外務省（因ニ云フ
カ當時ノ大臣ハ故小村壽太郎侯、次官ハ故珍田捨巳伯、政務局長ハ
故山島國次郎氏デアツタ）ト海軍省（當時ノ大臣ハ故山本權兵衛伯
ハ、南島島ガ日本領土デアルコトハ歴史的事實ニ徴シテモ明デア
カ、事態ヲ此處ニ放置スルニ於テハ或ハ米帆船前船乗組員ト我カ在留
民トノ間ニ不祥事ノ發生ヲ見ルヤモ知レス、又國旗保護ハ海軍ノ本
務デアル。仍テ高平公使來電ニアル如ク至急帝國軍艦ヲ該島ニ派遣
シ之ヲ確保スベシトイフニ意見ノ一致ヲ見タ。ソコデ、既ニ十日以
上前ニ帆船デ出帆シタ。出帆シタ日ヨリ一足先ニ南島島ニ
着ク必要ガアルノテ、派遣艦ニハ當時ノ快速巡洋艦笠置ガ選バレ、
外務省カラハ石井書記官（現樞密顧問官石井菊次郎子、當時電信課
長）ガ在日米公使ヨリ因ニズルニ宛テタ書面ヲ携帶、派遣サ

7
レルコトトナツタ。此ノ書面ニハ、米本國政府ノ訓令ニ依リ事情
ノ如何ニ拘ラズ日本人トノ衝突ヲ避ケ日米間ノ外交々涉ニ俟ツベキ
旨認メテアツタ。斯クテ笠置ハ帝國領土確保ノ使命ヲ帯ビテ七月二
十三日横須賀拔錨、一路東南上ノ弧島へ急行シタノデア
以下石井書記官ノ復命書ニ依レバ、笠置ハ航下スルコト四晝夜餘
ニシテ南島島ニ達シタガ、來テ見ルト島ハ「海底ヨリ兀立セル」小
珊瑚島ニシテ海邊港灣ナク加フルニ海水深クシテ錨ヲ下スニ由ガキ
ヲ以テ吾艦碇泊スルコト能ハズ絶ヘズ海岸ヨリ若干ノ距離ヲ隔テテ
漂流シ即チ晝夜間斷ナク石炭ヲ燃消シ居ラサルヲ得ズトイフ豫期
シナカツタ。障礙ニ出遇ツタ。ソコデ成ルヘク艦ノ滞留ヲ短縮シテ早
ク歸航ノ途ニ上ルノ必要ニ迫ラレタワケダガ、一方「因」ニズル氏
ノ率ユル米國商船ハ未ダ其帆影ヲモ現ハサザルノミナラス日來此方
面ニ於テハ引續キ殆ト風潮ノ變ナルヲ以テモリ
コト能ハズ

8

「是々於テ到着ノ翌二十八日笠置艦長ハ用意シ來リタル木材ヲ陸揚ゲシテ假屋建設ニ取懸ラシメ秋元中尉ノ下ニ水兵拾五名ヲ該島ニ暫ク滞在セシムルノ準備ヲ爲シ、石井書記官ハ「一面島内ノ我住民ヲ集メテ之ニ告グルニ今回我軍艦派遣及同書記官出張ノ大意ヲ以テシ、同時ニ米國商船來航ノ場合ニ於テハ我海軍士官ノ命令ニ違ヒ必ズ粗暴ノ行爲ニ出ヅベカラザル旨ヲ諭シ、一面ハ米國商船長ト「ズヒル氏ニ宛テテ一書ヲ裁シ初メ高平公使ノ來電ニ依テ同氏來航ノ事ヲ知ルヤ帝國政府ハ同公使ニ訓電ヲ送テ「カス島ノ業已ニ我版圖ニ歸入シ居ルノ事實ヲ示シテ華盛頓政府ノ注意ヲ喚起セシムルト同時ニ同島ニ向テハ一ノ巡洋艦ヲ簡派シ又親シク氏ト面話シテ必要ノ説明ヲ與ヘ彼我ノ間ニ行違ノ起ラザル様協議セシムル爲メ同(石井)書記官ニ出張ヲ命ジタル喜ヲ告ゲ、次デ該島ガ如何ニ早クヨリ我國民ニ知悉セラレ寄航セラレ移住セラレ遂ニ小笠原群島ニ編入セラルルニ至リタルヤヲ説明シテ彼ノ解得ヲ求メ、尙ホ進ムデ萬

9

一彼ニシテ以上説明ノ各項ヲ肯諾スルコト能ハズトセバ此上ノ商議ハ兩國政府ノ外交機關ヲ通シテ之ヲ遂グベキモノタルコト及差當リ彼我共ニ注意スベキハ彼ハ其率ユル水夫ヲ督諭シ我ハ我移住民ニ訓示ヲ加ヘ其間ニ不慮ノ行違ヲ起シ延テ國際問題ヲ演出セシムルガ如キヲ豫防スルノ必要ナル事等ヲ諭告シ、併セテ東京駐節ノ米國公使ガ本國政府ノ訓令ヲ奉ジテ彼ニ宛テタル訓令的ノ手柬ハ同書記官ヨリ彼ニ手交スベキ依頼ヲ受ケタル所事情ハ同書記官一行ノ延留ヲ許サザルヲ以テ同封轉交ノ旨ヲ告ゲタルノデアル。

石井書記官ハ前記の如く、ズビル宛書翰ヲ居残り士官秋元中尉ニ託シ
 我ガ移住民ニ就キ本島ノ既往現況等ニ歸スル取調ヲ遂ゲ猶ホ島内各
 部ヲ視察シタ上、七月二十九日再ビ笠置ニ搭乗、横須賀ニ向ケ歸航シ
 タ。トコロカソノ翌日即チ七月三十日、一足違ヒデ島ノズビルノ帆
 船「アレシ」號ガ南島島ニ姿ヲ現シタ。秋元中尉ハ早速「アレシ」號ヲ
 引見シテ石井外務書記官ヨリノ一封ヲ手渡シ同中尉ガ滞留スルコト
 トナツタ。爾末ヲ語ツタ上直チニ出帆スル請求シタガ、當時海上不
 慮ニシテ且ツ乗組員ノ確保上上陸ノ必要モアリ。又「アレシ」號ニハ
 合衆國農務省特派員トビシ「アレシ」博物館高等部主幹ノ一等客ガ乗ッ
 テ居リ兩博士ノ研究モアルノデ、ズビルハ當時南島ヲ許サレタ
 キ旨要請シタノデ、秋元中尉ハ一向五名ヲ限り尙之ニ責任者一名ヲ
 附セシメテ「アレシ」號乗組員ノ上陸ヲ許シ、前記兩博士ニハ一家屋
 ヲ酒席シテ島民一名ヲ附ゲ一週間南島ヲ許可シタ。

「アレシ」號ハ海々我方ノ指圖ニ從フノ外ナカツタ。斯クシテ「マ
 カス島」獲得ノ壯圖挫折シ八月七日同島ヲ立去ツテ空シク歸國シタ米
 船長ハ、本國政府ニ對シ帝國政府ニ「マカス島」島嶼探掘會社ノ損失
 辨償ト今般ノ帆船船運征費用支出方要求アリ度キ旨申請シタガ、合
 衆國政府ハ帝國政府ノ主張及ビ處置ノ妥當ナルヲ認めザルヲ得ナカ
 ツタノデ、「アレシ」號ノ申請ハ遂ニ取上ゲラレナカツタ。之ヲ以テ
 此ノ劇的トモ謂フヘキ事件ハ我方勝利ノ下ニ終結シタノテアル。

以上テ笠置ノ南島島派遣経緯ノ記述ハ終ツタワケテアルカ、前記
 石井外務書記官ノ報告書ニハ石ノ外南島島ノ情況ニ就キ興味深い
 調査報告カ記載サレテキルノテ次ニ簡單ニ之ヲ御披露スル。

先づ復命書ノ第一部「使命奉行」ノ末節ニ左ノ情味豊カナ報告ガ
讀マレル。「御訓示ノ意ヲ體シ坂本笠置艦長ト協議ノ上今向遠航ノ
土産トシテ居留民一同ニ目錄（白米六石、醬油七斗、味噌三十六貫
シヤガ芋玉葱子若干）ヲ寄贈シタリ。皇威遠洋ニ輝キ孤島民ノ雄心
ヲ勵シ加フルニ現情ニ於テ特ニ彼等ニ貴重ナル此惠贈アリ、一同感
激禁スル能ハス」

次ニ第二部「南島略記」中ニハ左ノ如キ報告ガ記サレテキル。
「形容ト本島ハ惟フニ海底ヨリ兀立スル珊瑚島ニシテ其海上ニ現
出スル部分ハ殆ト等邊三角形ヲ爲ス。本島ハ海面ヨリ高キコト約
十五呎ニシテ、、、、樹木鬱茂殆ト立錐ノ餘地ナシト云フテ
可ナリ。樹木ノ大部分ハ本邦内地ニ其類ヲ見サル一種（楡幹ハ柳
ノ如ク而モ燃料ニ適シ葉ハカシトユヅリハ折中シタルモノノ如
クニシテ粗葉ヲ煙草ニ代用スルヲ得ベシト聞ク）ニシテ、外ニ
椰子若干アリ。、、、
地味ハ地味ハ極メテ豊饒ナリ。殊ニ四時炎熱ノ天然ハ草木ヲシテ

13
常青滋蔓セシメ絶ヘテ枯凋ヲ見ス。例ヘバ内地ヨリ移植シタル茄
子唐辛等數年生縲ノ結果鞭杖ニ適スベキ小木ニ達スルヲ見ル。蓋
シ本島ニ巢棲スル無數鳥類ノ羽毛糞等ノ肥料ハ本島ノ地味ヲシテ
特殊自好ナラシムルモノナルベシ。、、、
鳥類一々ビ本島ヲ遠望スルモノハ先ヅ其島上及附近ニ飛舞スル
鳥類ノ夥多ナルニ驚セザルナシ。而シテ漸ク本島ニ近接シ更ニ
上陸島内ヲ巡歴スルニ迫ンテ茲ニ愈々其喫驚ヲ加フベシ。蓋シ此
等無數ノ禽鳥ハ何レモ海鳥ニシテ其島上ニ來集スルハ卵生ノ爲メ
ナリト云フ。故ニ一々ビ養卵ノ時聲ヲ了セバ去テ海上ニ歸リ更ニ
仲種即チ卵期ヲ異ニスルモノ代テ此土ニ來集ス。目下即チ七八月
ノ交該島ニ充塞スルモノハ四五種アリテ就中最モ多數ナルモノハ
其形内地ノ燕ニ類シテ大サ之ニ倍シ間々小鳩位ノモノアリ。我居
留民ハ假ニ之ヲ其羽色ニ從ヒ白燕、黑燕ト呼ブ。

現下該島ニ本邦人ノ居留スルモノ三拾名アリ。専ラ捕鳥ヲ業トス。朝夕捕鳥ノミニ従事スルモノハ一人一日三百羽ヲ超ユト云フ。借此等ノ捕鳥ハ之ヲ半割製ト爲シ内地ニ輸送シ横濱外商ニ販賣セラルルモノニシテ、其用途ハ西歐米ニ於テ婦人帽子ニ裝飾スルモノナリト云フ。而シテ其價格モ白色鮮麗ナル分ハ一羽五拾錢、黒色ニシテ比較的其美ナラサル分モ拾五錢乃至三拾錢位ナリト聞ク。右各種ノ鳥類ハ何レモ頗ル好味ヲ有シ食料ニ適スレドモ居留民ハ捕獲剩餘ニ多クニシテ其肉ヲ食ルニ暇ナク全然放棄ニ附セリ。

海産ト我居留民ノ言ニ據レバ近海頗ル魚産ニ富ミ、往年五六十年ノ居留民アリシトキハ其一部ハ漁業ニ従事シ捕魚ハ銀詰トナシ又ハ乾魚トナシ内地ニ輸送セシコトアリ。其種類ハマダ、松魚等多シト云フ。又捕鳥ノ暇中ニ於テ厭々アジ、イハシ等ヲ見ル事モ是等小魚モ亦少ナカラサル事ト思ハル。

天候ト本島ノ氣候ハ四時大差ナク概シテ炎暑ニ屬ス。一二月ノ内華氏百度ヲ超ヘ屋外百五十度ヲ過グル事珍シカラズ、一二月ノ交朝夕會々六七度ノ間ニ降ル事アレバ之ヲ最底ノ溫度トナスト云フ。概シテ空氣乾燥ニシテ健康地ナリ。

飲水ト本島ノ一大缺點ト謂フベキハ飲料水ナキ事是ナリ我居留民ハ時々驟雨ノ間ニ天水ヲ取汲シテ飲料ニ貯ヘ又海水ヲ蒸溜シテ之ニ補飲ヲ爲ス。

殖産意見ト本邦人百五十名乃至二百名ヲ移住セシメ、之ニ第一捕鳥第二漁獲第三耕作ノ三業ヲ適宜分賦シ相當ノ監督ト獎勵トヲ與ヘバ、第一捕鳥業ニ於テ毎年拾餘萬圓ノ輸出品ヲ見出スベク、漁獵耕作ニ於テ亦獨リ移住民ノ需要ヲ充スノミナラズ内地ニ幾分ノ輸出ヲ見ルニ至ルハ難カラサルベシ。

右ノ外、石井氏ハ「以上ハ單ニ本島ヲ一殖産地トシテノ觀察ナレドモ、本島ノ眞價ハ茲ニ在ラスシテ、寧ロ他ノ方面ニ在リト思ハル」ト斷ツタ上、復命書第三部ニ於テ次ノ通り「南洋專見」ナルモノヲ陳述シテギル。

「太平洋ハ方ニ列國環視ノ中心トナリ新世紀ノ活劇ハ此ノ大舞台ニ於テ演ゼラレントス。我帝國既ニ此洋面ノ一方ニ雄據ス。即チ豫メ此競争場裡ニ馳驅シテ排群優勝ノ算ナカラザルベカラズ。此洋面ニ星羅棋布スル大小幾多ノ嶋嶼ハ既ニ各國ノ占得ニ歸シ海圖上又一結ノ無所屬域ヲ見ザルガ如シト雖モ、一步ヲ進メテ實相ヲ窺ハバ所謂其占得ナルモノ一片紙上ノ空文ニ止リ陸ニ人跡ヲ印セス海ニ帆影ヲ留メザルノ島嶼少カラザルヲ見出スベシ。彼港灣ノ封鎖ガ實力的ナラザル可ラザルガ如ク、島地ノ占得モ亦漫リニ紙上ノ空文ヲ認ム可キニ非ズ。是ニ於テカ太平洋上敏活ノ運動ニ依テ機先ヲ制スルノ餘地今猶ホ多シト謂フベシ。」

一タビ内地ヲ離レテ南洋ノ一島ニ臨ム者ハ、如何ニ我國民ガ冒險好奇ノ壯心ニ富メルカヲ認ムルヲ得テ頼モシキ觀念ヲ起スベシ。彼等ハ狹安ナル帆船ニ依テ水天萬里鹿ヲ追ツテ山ヲ見ズ進航止ル所ヲ知ラズ、太平洋上殆ンド彼等ノ足跡帆影ヲ認メザルハナシ。盛ナリト謂フベシ。但シ憾クハ彼等獨リ雄心ニ富ミ財力之ニ副ハズ、業半バニシテ資缺キ功成ルニ及バズシテ事失敗ニ終ルヲ多シトス。

帝國ノ地勢民心既ニ此ノ如ク新世紀ノ局運以上ノ如シトセバ、南洋ニ於ケル我勢力ノ範圍ト活動ノ區域トヲ擴張スルハ今日ノ急務ナリト謂フベシ。

小笠原群島ヨリ東南五百餘哩ニシテ南鳥島アリ、之ヨリ西南五百哩ニシテ摩利亞奈群島アリ、正南一千哩ニシテ加呂林群島アリ、東南八百哩ニシテ馬沙瑠群島アリ、此レ皆我海國民ノ活動地域ナリ。今我ニシテ數隻ノ洋式帆船ヲ機裝シテ之ヲ有志ニ貸下ゲ加フルニ

若干ノ獎勵金ヲ與ヘ之ヲ誘導スルニ於テハ、奮テ斯業ニ從ハント欲スルモノ先ヲ爭フテ集來スベシ。是ニ於テ小笠原島ヲ以テ我南洋經營ノ根據地トナシ、南島島ヲ第一驛站トナシ、夫ヨリ漸ヲ以テ南進セシメ、又隨時軍艦ヲ派遣シ我移民ニ便宜ヲ施シ保護ヲ與ヘバ、此方面ニ於ケル我經營遠カラズシテ見ルベキモノアラン耶。若シ我政府ニ於テ此除伊豆七島ヲ經由シ小笠原南島ノ諸島ヲ通過スル海底電線ヲ架設スルノ計畫ヲ決定シ、以テ近キ將來ニ於テ實行ヲ見ルベキ太平洋ノ海底大電線ト連絡スルノ用意ヲ爲サルルニ於テハ、是亦我南洋經營ノ一大進歩ト謂フベシ。

蓋シ卓見ト謂フベク、今ヨリ四十年前既ニ斯ノ如キ雄渾ナル識見ヲ懷抱シテ居ラレタ右井子ハ正ニ名實共ニ我カ外交界ノ先驅者ノ一人ト謂フヲ得ルデアラウ。而シテ四十年來ノ我同胞ノ海外發展振リ、殊ニ今次大戦ニ於ケル皇軍ノ進攻振リト思ヒ合セルトキ、洵ニ今昔ノ感ニ堪ヘヌモノガアルデアハナイカ。

筆ヲ措ク前ニ今一言附ケ加ヘルコトヲ許サレタイ。印度洋ヨリ紅海ヘ入ル船ハ先ヅソコトヲ島ノ沖ヲ通過スル。更ニ進ムト右手ニアデシガ嚴然ト控ヘテキルノヲ見ル。而シテ紅海入口ノ最狹部ニハペリム島ガアル。而モ三者共英領ナルニ想ヲ致ストキ、旅人ハ今更ノ様ニ大英帝國建設者ノ先見ノ明ニ喫驚スルノデアアル。トコロデ此ノペリム島ノ由來ニ就イテモ、我ガ南島島確保ノ顛末ニ相觀スル興味深イ一挿話ガアル。時ハ西紀一千八百五十年カノナポレオン三世時代、即チ明治維新前デアアル。一日在アデン英國領事ハ馬耳塞ノ一佛字新聞ニ依リ佛國政府ガペリム島占領ノ目的ヲ以テ近ク同島ニ軍艦派遣方ヲ企圖シテ居ル事實ヲ知ツタ。該領事ハ本國政府ニ諷訓スルノ暇ガナイノデ、直チニ獨斷デペリム島ヘ急行シ、佛國ニ先シテユニオシ。ジヤツタヲ掲揚シ同島ノ英領ナル旨宣言シタノデアアル。斯クシテ戰略的價值大ナル此ノ島ハ英領トナリ、紅海ニ於ケル英帝國ノ優位ハ確保セラレタノデアアル。

右ハ一千八百七十何年カニアルヂ工駐劄英國ミニスター。レジデ
ントガ「之ハ二十年程前余ノ在アデン領事ナリシ頃ノ話ナリ」ト前
置シテ、アルヂエリア總督ジュル。カシボシニ述懐シタ話デアツテ、
カシボシ氏ハ之ヲ英帝國ノ出先ノ者ガ如何ニ自負心ニ富ミ且ツ機ヲ
見ルニ敏デアルカ、又外交ニ於テ如何ニ機先ヲ制スルコトガ大事デ
アルカノ好例トシテ、其ノ同願録ニ記載シテキルノデアアル。

20

トデアアル。

(完)

(外交評論四月號寄稿)

本文ニ於テ記述シタ我が南島島確保ノ經緯モ亦、之ニ劣ラザル機
敏ニシテ且時宜ヲ得タル處置ト謂フベク、高平公使ノ貴重ナ電報ト
我が海軍省ノ決斷トガ兩者共寔ニ當ヲ得タモノデアツタコトハ勿論
小村外務大臣ノ採ラレタ措置ハ實ニ侯得意ノ外交ノ眞骨頂ト謂フベ
キデアラウ。何トナレバ傳ヘ聞クトコロニ據ルト、侯ハ常ニ「先
ズレバ人ヲ制ス」ノ格言ヲ以テソノ外交ノ鐵則トシテ居ラレタトノコ